



上向台小だより

12月号

西東京市立上向台小学校

令和7年12月1日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>

映画『小学校～それは小さな社会～』から学ぶ 学習発表会に向けて大切にしたいこと

校長 酒見 裕子

澄み切った青空を背景に、校庭のメタセコイアのレンガ色の紅葉がひときわ鮮やかに映える季節となりました。

今週末には、いよいよ子どもたちが日頃の学習や活動の成果を披露する「学習発表会」が開催されます。体育発表会に引き続き、学習発表会も「自分たちでつくり上げる学習発表会」となるよう、教職員には子どもたちを支えていくように話しました。子どもたちが主体性を育むとともに、自らの役割を自覚し、友達と折り合いながら協力してゴールを目指していくためです。学習発表会は、このような力を育む絶好の機会です。発表の完成度を求めるとき、教員が「もっとこうした方が…」と指導する方が早く感じますが、言いたくなるところをぐっとこらえ、子どもたちが気付き、自分たちで改善できるようにすることを大切にしてほしいと願っています。

さて、既にご覧になられた方もいらっしゃると思いますが、昨年から見たいと思っていたドキュメンタリー映画『小学校～それは小さな社会～』が、11月の三連休に放送されていたので、遅ればせながら鑑賞しました。

日本の公立小学校での1年間の日常が、主に1年生と6年生を中心に撮影・編集されており、同じ学校現場で働く者として共感できる場面が多くある一方で、自分だったらどのように対応するか考えさせられる場面もありました。ご覧になられた方々と、ぜひ感想を交換してみたいなと思う作品です。この映画の子どもたちが社会性を育む様子は、海外からも大きな注目を集めているそうです。

小学校は、子どもたちにとっての「小さな社会」であり、集団生活を通して未来の社会で生き抜く力を身に付ける場です。子どもたちがこの「小さな社会」の中で、主体的に自ら進んで活動し、社会で立派に生きていくための力を育む活動の一つに「特別活動」があります。

特別活動は、係活動や当番活動、学級会といった日常的な学級活動から、委員会などの児童会活動、クラブ活動、体育発表会や学習発表会のような学校行事まで、幅広く含まれています。

その特別活動で最も大切にしているのは、「なすことによって学ぶ」という考え方です。知識を教えるのではなく、子どもたちが自ら活動を計画・実行し、その結果や過程を振り返ることを大切にしています。

特別活動を通して、子どもたちには主に以下の3つの大切な力を育てます。

- 1 人間関係形成：人間関係を上手に築く力
- 2 社会参画：社会の一員として参加する力
- 3 自己実現：自分らしく目標を達成する力

学習発表会は、特別活動の中で、学校行事の「文化的行事」に位置付けられています。その目標は、日頃の学習や練習の成果を発表し、「もっと自分を伸ばしたい」という向上心を育てること、そして、協力し合う過程を通じてお互いのよいところを認め合う喜びを得ることにあります。

冒頭の映画では、1年生の担任であるワタナベ先生を始めとする教員たちが、この特別活動のねらいを達成するために、子どもたちの成長に深く関わる様子が描かれています。特に、ワタナベ先生の指導の姿勢は、文化的行事の目指す「自己実現」の重要性を象徴しています。

映画では、1年生を迎える会の合奏に向けて、太鼓のオーディションに落ちたあやめさんが、シンバル役に再挑戦し、合格したものの練習を怠ってしまい、合奏担当の先生から厳しく叱責される場面がありました（この場面の指導については、いろいろな見方ができると感じました）。

その後、ワタナベ先生はあやめさんを優しく励まします。この「優しい励まし」は、単なる慰めではありません。特別活動が目指す「自己実現」とは、集団の中で、自分の課題を見付け、粘り強く取り組んで克服していく力（なりたい自分に向けてがんばる力）のことです。ワタナベ先生は、オーディションという試練を経て落ち込んだ子どもに対し、優しく寄り添うことで、自分自身の内面的な課題（練習への意欲や失敗からの立ち直り）に向き合い、最後までやり抜く強い意志を育むことをサポートしたのです。あやめさんが1年生を迎える会で堂々とシンバルを打ち鳴らす姿は、彼女が努力によって試練を乗り越え、集団の中で自分の役割を果たし、役に立ったと実感した瞬間であり、「自己有用感（自分は社会で尊い存在なのだという自覚）」が育まれたことを示しています。これは、文化的行事のねらいである「学習活動の成果を発表し、自己の向上の意欲を一層高める（もっと頑張ろうという意欲を育てる）」ことを体現しています。

一方で、映画の中で、日本の特別活動は協調性を重んじるあまり、「同調圧力（みんなと同じことをしないと排除される雰囲気）」という危険性をもつ「諸刃の剣」になり得ることも指摘されています。もし、学習発表会の準備が、教師の意向や一部の活発な児童の考えだけで動かされたり、単なるなれ合いになったりすれば、特別活動の望ましい姿とは言えません。

だからこそ、教師は指導に際し、過度な競争や同調圧力が生まれないよう細心の注意を払っています。目指すのは、「互いのよさや可能性を發揮し、生かし、伸ばし合う」集団活動です。

学習発表会の準備では、多様な意見を尊重し、全員が納得できる解決策を話し合い（合意形成）、全ての児童が役割を担い、活動に参加できるように工夫されています。子どもたちは、話合いの過程で、自分と異なる考えがあることを理解し、お互いに折り合いをつけながら、よりよい「答え」を協働して見付け出す力を養っているのです。

このような行事は、とかく本番での「結果」が重視されがちですが、子どもたちには「当日までの過程（プロセス）」が大切だと話しています。自分なりの目標を立て、見通しをもって、計画的に練習に取り組み、振り返る。このような力は、本校では学習を進める上でも大事にしていることです。

御家庭におかれましても、学習発表会の上手さや結果だけでなく、ぜひ「練習の過程でどんな難しいことを乗り越えたか」、「友達とどのような役割を分担して協力したか」といった活動のプロセスに目を向け、温かい励ましの言葉をかけていただければ幸いです。

学校は、子どもたちだけでなく、教師にとっても日々学びの場です。教員たちは常に試行錯誤を繰り返しながら、子どもたちが未来の社会を豊かに創り出す「社会の形成者」として成長できるよう努めています。引き続き、本校の教育活動に御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。